

に3～6Hzの徐波が中等度混入していた。最終的には遺伝子診断（於当院神経内科）にてこの疾患の病因遺伝子とされている EIF2B5 gene に新規の mutation を認め、診断確定された。

【考察】LVWM は主に小児に発症する疾患で、現在までに35家系41症例が報告されているが、うち成人発症例は1例しか報告がない。慢性的な経過をたどり、小児例の主症状として Ataxia, Spasticity, Epilepsy, 成人例では Dementia が報告されている。画像上白質脳症を呈し、進行例ほど病変部に髄液と同じ intensity を示す部分が増加する。また症例の多くで特定の遺伝子に変異を認める。この症例は周囲の刺激に対して易怒的または無関心な態度をとり、万引き常習などの異常行動を認めるなど臨床上極めて Pick 病に類似している点が多い。しかし発症から15年以上経過している割に比較的人格は保たれ、Pick 病特有の常同行為や言語症状は認めずさらに画像及び脳波所見においても全く異なる所見を呈していた。

II. 特別講演

「高次脳機能の症状と病巣」

相馬神経内科クリニック

相馬芳明

第5回新潟 GHP 研究会

日時 平成15年1月25日(土)
15時30分～
会場 ウェルシティ新潟
(旧新潟厚生年金会館)

I. 一般演題

1 身体症状へのとらわれのパロキセチンが奏効した身体表現性障害の一例

大塚 道人・豊岡 和彦・阿部 美紀

橘 輝・染矢 俊幸*

新潟大学医学部附属病院精神科

新潟大学大学院医歯学総合研究科

精神医学分野*

今回我々は、夫の暴言、暴力や病気の息子の世話をきっかけに、腹部膨満感、便秘といった身体化症状が出現し、さらにその症状を過度に気にするようになり、続いて大うつ病性障害も合併した症例を経験した。入院治療によりフルボキサミン投与を開始したところ、抑うつ気分の軽快をみた。身体化症状およびその出現に対する不安が強く残存した。そのため身体化症状とその不安感の治療目的にフルボキサミンからパロキセチンに薬剤置換したところ、徐々に身体化症状は軽減し、ほぼ寛解状態に至った。今回の症例では、フルボキサミンより同じ SSRI であるパロキセチンの方が身体表現性障害に対して有効であった。現在、身体表現性障害に対する一定の薬物治療は確立されておらず、抑うつ気分、不安を伴った身体化障害に対して抗うつ薬、抗不安薬が使われることが多い。そこで症例報告し、加えて身体表現性障害の治療法についての考察をする。